よこまち余話 (2)

（母とふたりで魚屋を切り盛りしている浩一は、弟の中学合格を祝うため、月に一度通う和菓子屋・光月堂に十五箱の紅白まんじゅうを注文しました。）

「困ります」

浩一は食い下がった。小銭をかき集めて光月堂に行ったのに、「お代はいいよ。うちからのご祝儀だ」と①親爺さんはその金を受け取ろうとしないのだ。

「それはやっぱり、どうしたって困ります」

しつこく云い募ると、終いに親爺さんは、

「やるっつったらやるんだ！　月に一度っきゃ来なくても、一応はお得意さんなんだからよっ」

と、乱暴に云い捨てて、とっとと作業場に引っ込んでしまった。浩一は身をすくめ、どうしていいかわからずに立ちつくす。

「あれで、うれしくってしょうがないんですよ」

親爺さんの代わりにまんじゅうを包みながら、お弟子さんが云った。彼はここしばらくの間にニキビが消え、頬とあごも精悍に尖ったようだった。浩一と歳はさほど変わらないはずだが、浩一よりずっと先にいる顔になった。

「弟さんが中学に受かったのも、浩一さんがお祝いのことでうちに相談に来てくれたのも、親父は両方ともうれしかったんですよ」

浩一は、袋を受け取ってもまだまごまごしていた。長く※逡巡したあと、※天啓を得たように頭を撥ね上げ、②「そうだ、草餅」と叫んだ。ポケットから小銭を取り出して、「草餅をふたつください」と、お弟子さんに頼む。

「気を使わなくてもいいですよ」

「いえ。僕が食べたいんです。春が来ましたし」

浩一が真面目に返事をすると、お弟子さんは頬を弛め、③それから丁寧に草餅を包んだ。その分の代金はちゃんと受け取った。浩一はそれでも、店を出るたった三歩ほどの間に十回以上は頭を下げた。お弟子さんは奥に戻るに戻れず、浩一を見送りながら、困り果てた様子で何度もこめかみを掻いていた。

（木内昇『よこまち余話』中央公論新社　による）

※逡巡…ぐずぐずとためらうこと。　天啓…天の啓示。天が示した導き。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「親爺さんはその金を受け取ろうとしない」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア いつまでも食い下がる浩一に腹が立ち、まんじゅうの代金を受け取る気がうせてしまったから。

イ 小銭をかき集めてきた浩一を見て、一応はお得意さんでもある浩一からなけなしのお金をもらうのは気が引けたから。

ウ 浩一の弟が合格し、浩一がお祝いの相談に来てくれたことがうれしく、まんじゅうを祝儀にあげたいと思ったから。

(2) ――線②「『そうだ、草餅』と叫んだ」とあるが、このときの浩一の様子として適当なものを選びなさい。

ア 春が来ていたことに思いいたり、まんじゅうのほかに草餅を買って帰るつもりだったことを思い出している。

イ まんじゅうの代金を払(はら)わないこととなったので思いがけず小銭があまり、草餅も買う余裕(よゆう)ができたのを喜んでいる。

ウ 何も払わずまんじゅうを受け取るわけにはいかないと思い、草餅を買い、せめてそのお代を払って帰ろうとしている。

(3) ――線③「それから丁寧に草餅を包んだ」とあるが、このときの「お弟子さん」の様子として適当なものを選びなさい。

ア せめてもの思いを示そうとする浩一に対し、誠実な態度でその気持ちにこたえようとしている。

イ 草餅の代金を受け取ることで親爺さんに叱(しか)られるのではないかと恐(おそ)れつつも、やむを得ず草餅を包んでいる。

ウ 親爺さんと浩一の間にはさまれることとなってしまい、困惑(こんわく)しながらも自分の仕事をこなそうとしている。